

## 和崎ハル書簡に見る伊藤永之介文学

石塚 政吾

### Literature of Einosuke Ito appeared in Letters of Haru Wazaki

Seigo Ishizuka

(令和 6 年 2 月 13 日 受理)

This paper focuses on the works of Einosuke Ito, who appears in the letters and other works of Haru Wazaki, a native of Akita Prefecture who became the first female representative after the war.

Einosuke Ito (1903.11.21-1959.7.26) is a writer from Akita City. His activities from the end of the Taisho era to the middle of the Showa era give us one perspective that marks Showa literature. This paper is an attempt to examine the influence of Haru Wazaki on Einosuke's literary creation.

本稿は、秋田県出身で戦後初の女性代議士となった和崎ハルの書簡等（以後「ハル書簡」）の中に登場する伊藤永之介作品に注目し、その文学について考察したものである。

「ハル書簡」は、主として昭和 25 年から 26 年にかけて交わされたはがきと封書等 52 点である。[1]

#### 1. 和崎ハルと伊藤永之介

和崎ハルは、明治 18 年に秋田市榎山栗谷家に生まれた。37 年、秋田県立秋田高等女学校を卒業。40 年、金沢市の和崎豊之に嫁し、5 人の子の母となった。大正 11 年、夫病没後、郷里秋田へ帰り、職業婦人として活躍。婦人矯風会に参加し、秋田県をして全国に魁けて廃娼県とした。13 年には芸者学校「のぞみの会」を創設。昭和 4 年、秋田婦人聯盟を設立。市川房枝に師事し、婦人の地位向上に力を尽くした。21 年 4 月の総選挙で初代婦人代議士として当選した。26 年 11 月、金照寺山に顕彰碑建立。27 年 12 月、68 歳で亡くなった。[2]

和崎ハルと伊藤永之介の関係は、ハルから見て永之介は娘婿、永之介から見てハルは義母に当たる。永之介は、昭和 2 年 11 月に、ハルの長女輝子と結婚し、上京して本格的な作家活動に入っている。

#### 2. 「ハル書簡」

「ハル書簡」は全部で 52 点から成り、葉書が 30 通、封書が 15 通（うち封筒のみが 2）、便箋のみが 7 点である。便箋のみのうち 1 点は日付が明記されて

いる。差出人が和崎ハルのものは、43 通（葉書 28、封書 15）、宛先はいずれも伊藤輝子（うち「皆様」と附記された葉書と封書がそれぞれ 1 通、「伊藤永之介様内」と表記された葉書が 1 通、和崎タカ子と連名の封書が 1 通）である。差出人が和崎ハル以外のものが 7 点（和崎タカ子 4、伊藤静子 2、菅原和子 1、トミ 1）あり、ハルが書いたと思われる便箋のみのものが 2 点ある。

消印が不明で、書かれた時期を明確に特定することが困難なものもあるが、概ね昭和 25 年 9 月から 26 年 11 月までに書かれたものと思われる。その根拠は、(1)宛先が渋谷区代々木上原であること、(2)内容が建碑に関わっていることである。書簡はほとんど輝子宛だが、輝子の上京は昭和 25 年 4 月である。最も新しいと思われるのは、昭和 27 年 7 月 23 日付の葉書だが、亡くなる 5 ヶ月前のもので、自ら筆を執ることは叶わなくなっており、代筆である。便箋のみのものも含め、大阪移住と建碑に関わる内容が主で、建碑の除幕は 26 年 11 月 18 日に行われた。

#### 3. 「ハル書簡」に登場する伊藤永之介

「ハル書簡」中で伊藤永之介の固有名が記されたものは 12 点（内、宛名のみが 2 点）ある。差出人がハルのものが 11 点（内、宛名のみが 2 点）、差出人菅原和子のものが 1 点である。ハルが書いた 9 点の書簡中に永之介の名が記されたものを古い順に示すと次のとおり。

- (1)「永之介さんは泊まりもせずに帰ったので物足りないです」(昭和 25 年 9 月)
- (2)「永之介さんの手紙読みましたが大阪へ行きます」(昭和 25 年 11 月 29 日)
- (3)「永之介さん大にやりなさい」(昭和 26 年)
- (4)「永之介さん書いたの今日よみ又明日朝によむつもり」(昭和 26 年 9 月 6 日)
- (5)「全くうまいね今伊藤永之介といふ名出たらなんでも見ます」(昭和 26 年 9 月 12 日)
- (6)「さて文学界といふのに永之介菊枝といふ小説だね」(昭和 26 年 9 月 15 日)
- (7)「先日ならば永之介さん書いてくれるとの事やめになったの」(昭和 26 年 10 月 16 日)
- (8)「古村主人曰く、永之介様でも書いて名だけ先生にしたらと申されましたよ」(昭和 26 年 10 月 21 日)
- (9)「永之介様の大阪新聞の記事よんだ」(昭和 26 年 10 月 29 日)

(1)は、永之介が来秋したがすぐに帰ったことへの不満を述べたもの。昭和 25 年 4 月に輝子が息子等を連れて上京しており、上京後の娘や孫たちの様子を聞きたかったのであろう。続けて「足痛くてまだ車に乗ってをります。」とあることから、体調不良から身の振り方を考えていたと思われる。治療のことを考えると、大きな病院のある東京か大阪への転居を考えたのであろう。東京には長女輝子、大阪には長男嘉之がいる。東京での同居の可能性をうかがわせるものである。

(2)は、同居話がある意味裏付けるものである。「永之介さんの手紙」の内容は不明だが、永之介の提案を蹴って大阪行きを決意した様子がうかがえる。ハルの大阪転居は昭和 25 年 11 月 29 日である。

(3)は、「三十一日朝食の時始めて三山様のことを嘉之からききました。」で始まる葉書である。「三山様」とは、武埴三山(祐吉)[3]のことで、4月に行われる秋田市長選に出馬するという話を長男の嘉之から聞いたというのである。三山は永之介とは新聞記者時代から相識の仲で、昭和 23 年 1 月には『秋田文学』創刊にともに関わった。「三山市長ならばよいね。あの人全々好人物大賛成大賛成。永之介さん大にやりなさい」というのは、三山の応援を精一杯しろと激励しているのである。

(4)(5)(6)は、近接する日時の封書と葉書で、いずれも昭和 26 年 10 月 1 日発行の小説に触れた内容となっている。(4で詳説)

(7)(8)は、いずれも建碑に関わる内容である。(7)

は、講和成立の年に平和記念の意を込めて 11 月 3 日に建てたかったが、碑文を依頼した市川房枝からなかなか届かないことを嘆く文から始まり、碑の表だけでもよいからすぐに書いて欲しいと希望する。そして、「裏は又誰れか書くのでないかしら。先日ならば永之介さん書いてくれるとの事やめになったの」と、永之介に依頼したが叶わなかったことが記されている。(8)は、建碑と併せて自伝と思われる本を出す計画についても触れている。[4]「本の事委しいこと判大喜び」で始まり、碑文については弟からの手紙で表だけ市川先生に書いてもらい、後は秋田にいる者で何とかすることに決まった。市川先生は多忙なので、「古村主人曰く、永之介様でも書いて名だけ先生にしたらと申されましたよ」というのであった。

(9)は、市川先生の碑文も無事に届き、紀功碑の除幕式出席のため東京経由で秋田へ行くに当たって、出迎えと付き添いを輝子に依頼した葉書である。本は人文閣から出すことになったことを報告した後で、『大阪新聞』の記事について触れ、「秋田の小説きれて駄目ね。私は熱心によんでをったのがっかりした」と続く。

#### 4. 「ハル書簡」に登場する伊藤永之介の小説

「ハル書簡」には、永之介の小説に言及したものが 6 点ある。

(1)「小説新潮を買ひました。三太郎を皆で回覧するつもりですよ」(昭和 25 年 10 月 3 日付け封書)

(2)「三太郎大変面白かったよ」(昭和 25 年 10 月付け葉書)

(3)「永之介さん書いたの今日よみ又明日朝によむつもり」(昭和 26 年 9 月 6 日付け封書)

(4)「小説朝日実によく出来、こんなにうまいかしらとおどろきました。全くうまいね今伊藤永之介といふ名出たらなんでも見ます」(昭和 26 年 9 月 12 日付け葉書)

(5)「さて文学界といふのに永之介菊枝といふ小説だね」(昭和 26 年 9 月 15 日付け封書)

(6)「永之介様の大阪新聞の記事よんだ。秋田の小説きれて駄目ね」(昭和 26 年 10 月 29 日付け葉書)

小説の題名が明確に示されているのは、「三太郎」と「菊枝」である。掲載媒体として、『小説新潮』『小説朝日』『文学界』『大阪新聞』を確認することができる。

(1)(2)は「三太郎」について、(3)(4)(5)は、昭和 26 年 10 月 1 日発行の雑誌に掲載された小説につ

いて、(6)の「大阪新聞の記事」とは、昭和 26 年 10 月 24 日の『大阪新聞』に掲載された随筆「稲刈の後」のことで、「秋田の小説」とあるのは、その中で言及している「私は目下自分の故郷秋田に於ける明治維新の戦争を、ある雑誌に連載物として書いているが」とある小説への言及と思われる。[5]

昭和 26 年 10 月 1 日発行の雑誌に掲載された小説は次の 4 編である。

- ①「村のナイト・クラブー一本木町警察日記ー」(『小説新潮』5 巻 13 号)
- ②「菊枝」(『文学界』5 巻 10 号)
- ③「緑衣の女」(『小説朝日』1 巻 5 号)
- ④「ある家出娘の手記」(『農民文学』2 号)

(3)の「永之介さん書いたの」がどれを指すのかははっきりと示す言葉は書かれていないが、続けて「うまいね此位の東北弁なら関西人もわかるなるべく秋田弁入れないこと」とあることから、秋田や東北を舞台にしたものか東北人が登場するものと思われる。「ある家出娘の手記」は、茨城県出身の娘の手記であり、「緑衣の女」は戦中の南支を舞台とする小説である。したがって、①か②のどちらかではないかと思われる。(5)で、『文学界』に「菊枝」という小説が出ていることに触れ、続けて「まだ見ないが」とあることから、(3)の「永之介さん書いたの」は「村のナイト・クラブ」と思われる。

#### 4. 1 「三太郎」

(1)(2)の封書及び葉書で確認できる小説が「三太郎」である。[6]

「三太郎」は『小説新潮』4 巻 12 号(昭和 25 年 11 月 1 日)に掲載された。語り手「私」が北海道への社用の帰りに故郷の恩師冬木青峯先生を見舞い、園枝夫人の口を借りて、生前の青峯先生及び三人の町会議員の性行を暴露する話である。謹厳実直で知られた青峯先生や不況下の莫大な支出事業計画に反対した町会議員といった社会的には公明正大な行いをした 4 人だが、こと性に関しては不謹慎極まりない一面がコミカルな語り口で描かれる。

#### 4. 2 「村のナイト・クラブ」

「村のナイト・クラブ」は「一本木町警察日記」と副題が付されている。後の警察日記シリーズの先鞭とも言える作品である。

生理日ごとに万引を繰り返す娘の取り調べをしているところへ、坊田村で窃盗事件があったと電話が入る。山谷セキが、娘の桃代の着物を入れていた梱

を盗まれたのだった。セキ・桃代親娘は、村では通称「ナイト・クラブ」と呼ばれる売春宿として知られている。犯人は桃代の情夫朝治だった。

#### 4. 3 「緑衣の女」

「緑衣の女」は『小説朝日』1 巻 5 号(昭和 26 年 10 月 1 日)に掲載された。葉書では小説の題名は示されていないが、『小説朝日』に発表された小説で、9 月 15 日以前の段階で読むことが可能なのは「緑衣の女」である。

「こんなにうまいかしらとおどろきました。全くうまいね」と絶賛している。しかも続けて、「洋次郎のなんか全く下らないねあんなに下手なのにどうしてだろうと、一つは外交でないかしら」と、当時『青い山脈』が映画化されて大ヒットとなった石坂洋次郎を引き合いに出してまでいる。

「緑衣の女」は、戦中の南支を舞台に日本人中尉が不当に虐げられる現地華人を救う話である。髯鬚大人の名で通っている稲葉中尉は、貧しい百姓たちに愛情をもって接し慕われていた。橋梁破壊の嫌疑で逮捕された宋正恵と漢口から奉公に出され売笑婦を強要されそうになった李紅蓮をはじめとする女たちを救う。

#### 4. 4 「菊枝」

「菊枝」は『文学界』5 巻 10 号(昭和 26 年 10 月 1 日)に掲載された。夫を戦争で失った菊枝という女性の生涯を描いている。義弟を連れて帰省した菊枝が、亡くなった母キクの墓の前で、大阪での女中奉公の頃を回想する。

「さて文学界といふのに永之介菊枝といふ小説だね。まだ見ないが、菊枝なんて万一小泉夫人のことを書いたのではないかとハラハラして大心配よどうだね」「菊枝の小説返事下さい。万一そうしたら大変だね。別の名にしたらよかったのに」とある。

小泉夫人とは建碑発起人の一人である小泉キクエのことである。永之介には女性の固有名詞を題名にした小説も複数あるが、素材としてハルと関わりのある人物を用いていた様相が見て取れる。[7]

#### 4. 5 「ハル書簡」に表れた永之介文学の特徴

こうして「ハル書簡」に表れた伊藤永之介の小説群を見ると、女性に関わる問題意識の高さをうかがうことができる。「三太郎」では語り手に園枝夫人が設けられ、夫を含んだ三人の町会議員の女性関係にまつわる妻たちの葛藤が描かれており、「村のナ

イト・クラブ」では性を売り物に生活するセキ・桃代親娘の様子が、「緑衣の女」では売笑婦を強要されそうになる李紅蓮、「菊枝」では戦争未亡人となった園枝の結婚問題が扱われている。

ハル自身未亡人でもあり、女手一つで五人の子供を育て上げ、婦人矯風会や婦人聯盟に所属し、女性の地位向上に尽力したことを考えれば、女性に関わる問題意識を盛り込んだ永之介の小説群に強い関心を示したであろうことは想像に難くない。

一方、同じ年の同じ月に発表した小説のいずれにも、女性問題に関わるモチーフが盛り込まれている点からは、永之介の創作意識にハルの活動が如何に大きな影響を与えていたかを思わせる。永之介は、秋田へ疎開した時期（昭和 18 年 10 月から 23 年 11 月）、ハルと同居している。

永之介は戦前、文芸戦線派の作家として、「総督府模範竹林」（『文芸戦線』7 巻 11 号 昭和 5 年 11 月 1 日）、「平地蕃人」（『中央公論』45 巻 12 号 昭和 5 年 12 月 1 日）、「万宝山」（『改造』13 巻 10 号 昭和 6 年 10 月 1 日）、「裸の土地」（『改造』14 巻 3 号 昭和 7 年 3 月 1 日）などの、所謂植民地物の諸作を発表している。「緑衣の女」は、舞台が南支に設定されている点では、これら植民地物に連なる作品と言える。

戦時中に華人を虐待する日本軍人を描くことは出来なかった。無実の華人に橋梁破壊の嫌疑をかけて死刑にしたり、売笑婦を強要する日本軍人の実態をうかがわせる描写は、戦後だからこそ可能となった。そして、華人を救う稲葉中尉のような人間性を備えた軍人を描いた点には、戦争に対する抵抗意識がはっきりとうかがえる。

また、売笑婦を強要された華人女性の名は「李紅蓮」で、稲葉中尉は一時スパイではないかと疑念を抱く。昭和 26 年、李香蘭はイサム・ノグチと結婚し、新聞や雑誌でも取り上げられ、評判となっていた。中国人女優として人気を博し、日本国籍であることが知られてからは、スパイ説も流された李香蘭と一字違いの名を冠せられた李紅蓮こそが、タイトルに示された「緑衣の女」なのである。

こうした時事的題材を盛り込み、読者を取り込んでいく永之介の創作態度は、この後のシリーズものである「警察日記」の諸作を読み解く鍵となる。

## 5. 成果と課題

「ハル書簡」の存在により、従来の伊藤永之介及びハルの年譜への補足修正を要することとなった点

が最大の成果と言える。[8]

永之介の居所について、従来の年譜では昭和 25 年 1 月に渋谷区代々木上原 1144 番地の三井方に入居し、同年 9 月に渋谷区代々木上原 1226 番地に移転したとされる。ところが、6 月 9 日消印の封書の宛先は代々木上原 1226 番地となっている。転居の時期について修正の可能性が出て来た。

ハルの大阪移住の日付について、武埴三山は「昭和二十五年十月十二日の夜秋田を去ったのである」（『秋田の人々』秋田県広報協会 昭和 39 年 1 月 7 日 p.96）としているが、秋田消印 11 月 29 日の葉書に「まだ出発の日決定せず。……十二月中には出発しますよ」とある。

昭和 26 年 10 月 29 日付け葉書に記された「大阪新聞の記事」が「稲刈の後」であることは判明したが、その中で言及している「私は目下自分の故郷秋田に於ける明治維新の戦争を、ある雑誌に連載物として書いている」の連載物については不明である。

ハルの自伝と思われる本については、昭和 26 年 10 月 29 日付け葉書で、「本の方一切堀川様引受けられ、涙のみ出ました。金一銭も入らないと申しましたよ。あと二日位で原稿送ります。年末迄に出来るとのこと、私百五十あれば沢山、あと人文閣で売って下さるとよい」とあることから、出版に至ったと思われるが、未見である。

ハルが大阪から送った封書の封筒は、長男の嘉之が勤めていた摂津酒造株式会社のものを利用していることがわかる。摂津酒造とは、日本のウイスキー発祥の原点である。「酒」（『国民新聞』大正 10 年 3 月 20,22 日）の入選から始まった伊藤永之介の文芸への道は、酒で命を縮めたことで幕を閉じた。永之介と酒との接点をうかがわせる事実である。

《参考文献》

[1]和崎ハルの孫に当たる軍司路子さんが北条常久氏に寄託したものである。令和元年 11 月に「県民読書おすすり講座」(秋田県生涯学習センター主催)で伊藤永之介を担当した際、シニアコーディネーターを務める北条氏より、解説・活用を依頼されたものである。和崎ハル関係の書簡は、他に秋田県立図書館にも複数所蔵されている。

[2]本書簡中に、顕彰碑の建立に当たっての略歴をハル自らが書いたものを踏まえ、和崎ハル『私の歩んだ道』1945.10)等を参照してまとめた。

[3]武埜祐吉(明治 22 年 8 月 15 日～昭和 39 年 4 月 3 日)ノ号三山。旧上井河村井内字屋布台(井川町)の農、祐蔵の長男。早大法科卒。秋田魁新報社常務取締役を経て昭和 21 年に社長就任。26 年 4 月、秋田市長に当選。文人市長として親しまれ、二期八年務めた。34 年、秋田放送の社長に就任。(『秋田人名大辞典』秋田魁新報社編・発行 1974.8.1 p.254 参照)

[4]和崎ハルには、すでに[2]に示したように『私の歩んだ道』という著書がある。その最後の章は、「終戦と婦人参政権」である。内容としては、その続編ではなかったかと思われる。

[5]雑誌の発行日は実際の書店に並ぶ発売日とは異なる。10 月 1 日発行の雑誌の発売日は 9 月上旬である。

[6]「三太郎」に言及したハルの封書は輝子宛で、封筒の切手が切り取られており、消印は一部しか残っていない。封筒裏面に「十月三日」と記されているので、消印の一部残っている日付は「4」と思われる。宛先は「渋谷区代々木上原一一四四 三井様方」、差出人住所は「秋田市金砂町」となっている。したがって、ハルが秋田在住で輝子が上京後であるから、昭和 25 年の封書である。

[7]「文代」(『若草』16 卷 12 号 昭和 15 年 12 月 1 日)、「雪代とその一家」(『群像』4 卷 3 号 昭和 24 年 3 月 1 日)、「加代」(『群像』8 卷 7 号 昭和 28 年 6 月 15 日)

[8] これまでにまとめられた主な伊藤永之介の年譜および著作目録としては、次のものがある。

①徳田戯二「伊藤永之介小伝一・二」(『社会主義』97・98 号 昭和 34 年 9 月 1 日・10 月 1 日 p.53～56・56～62)

②「年譜」(『伊藤永之介作品集 I』ニトリア書房 昭和 46 年 10 月 20 日 p.423～430)

③浦西和彦「伊藤永之介著作目録」(『関西大学文

学論集』24 卷 3・4 号 昭和 50 年 3 月 31 日 p.27～56)

④「略年譜・主要著作目録」(『作家・伊藤永之介』秋田県教育庁文化課編 昭和 60 年 12 月 8 日 p.34～42)

⑤浦西和彦「伊藤永之介年譜」(『伊藤永之介選集』和泉書院 平成 11 年 7 月 26 日 p.293～333)

⑥千葉三郎・小野一二「伊藤永之介著作目録」高橋秀晴「伊藤永之介年譜」(『国文学解釈と鑑賞別冊 伊藤永之介生誕百年』至文堂 平成 15 年 9 月 15 日 p.180～202)



《附録》「ハル書簡」資料

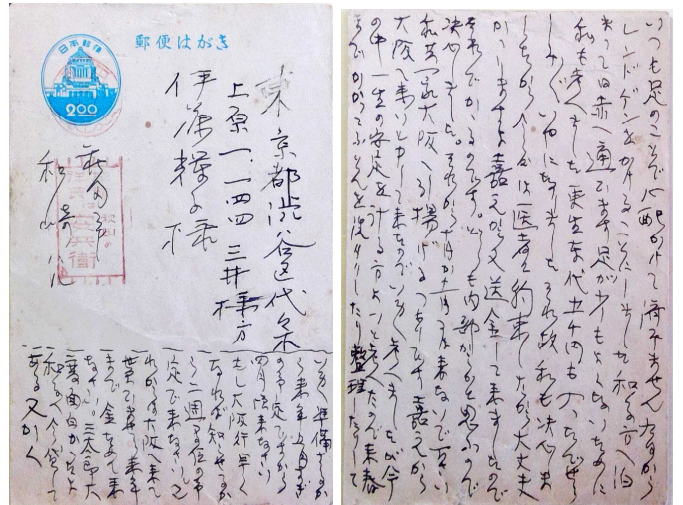
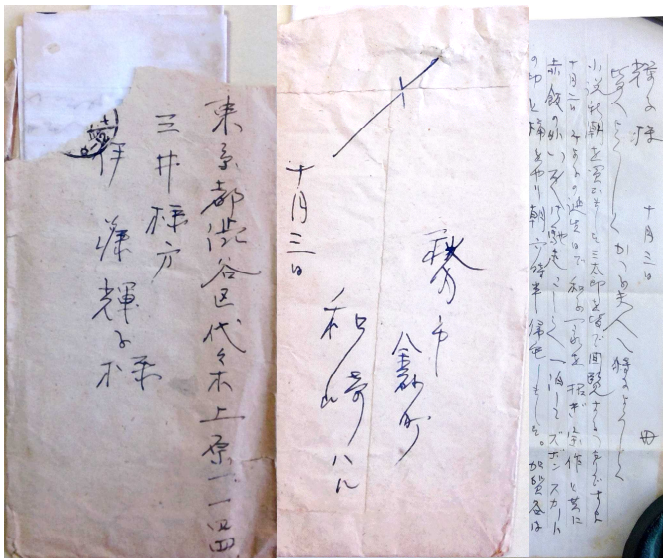
I 「ハル書簡」一覧表

整理番号	西暦	昭和	年	月	日	内 容	差出人	差出人住所	消印	筆名・封筒	受取人	受取人住所	備考	
1	1950	昭和	25	9	11	定のことで心配がけました。毎日毎て休めたらなほなほ。サマメールとかいふ書ついたら大分よから。あと二	和嶋ハル	秋田市	秋田25.9.11	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
2					9	17	ニューースト。広瀬夫人一家は二十四日間に逃げました。いろいろ調べました。その家の一室が博物館研究所と	和嶋ハル	秋田市	秋田25.9.17	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書
3							和嶋ハル	秋田市	秋田(不明)	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
4							和嶋ハル	秋田市	秋田	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
5					10		和嶋ハル	秋田市金沢町	不明	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
6							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
7					10	15	和嶋ハル	秋田母子寮	秋田25.10.15	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
8							和嶋ハル	秋田市	秋田	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
9					10	18	和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
10					11		和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
11					11		和嶋ハル	秋田市	秋田25.11.11	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
12					11		和嶋ハル	秋田	秋田25.11.29	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
13					11	29	和嶋ハル	秋田市	秋田25.11.29	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
14							和嶋ハル	秋田市	秋田(不明)	葉書	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
15							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
16					12	20	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
17					24		和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
18					12	29	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
19					12	27	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
20							和嶋ハル	大阪市	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
21							和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
22	1951	昭和	26	1	6	朝欄橋から御礼を買いたたき。御礼を書いたのが見えます。開口しました。引越しの日初失したので皆様の前不明な	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	お年よきじ付	
23							和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	お年よきじ付	
24							和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
25							和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
26					6	9	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町三〇〇九	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
27							和嶋ハル	大阪天王寺南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
28					6	29	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
29							和嶋ハル	大阪アベノ区天王寺南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
30					8	18	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
31							和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
32					6	29	和嶋ハル	大阪市アベノ区天王寺南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
33					9	12	和嶋ハル	大阪市アベノ区天王寺南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
34					9	15	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
35					10	9	和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
36					13		和嶋ハル	大阪アベノ区天王寺	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
37					16		和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
38					18		和嶋ハル	大阪市阿倍野区天王寺町南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	茶色の封筒	
39							和嶋ハル	大阪アベノ区天王寺南一ノ三七	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
40					10	29	和嶋ハル	大阪アベノ区天王寺	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
41					10	30	和嶋ハル	大阪アベノ区天王寺	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
42					11	30	和嶋ハル	大阪市アベノ区天王寺	阿倍野	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
43							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
44							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
45							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
46					5	11	和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
47							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
48							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
49							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
50					21	01	和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
51							和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	
52					11	24	和嶋ハル	秋田市	秋田	封筒	伊藤輝子様	東京都渋谷区代々木上原一四四三井橋方	官製葉書	

II 「ハル書簡」に登場する伊藤永之介の小説関連

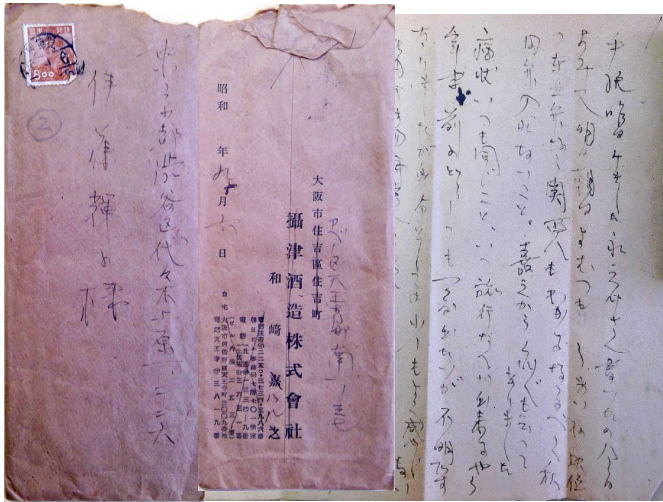
(1) 整理番号5 「小説新潮買ひました。三太郎を皆で回覧するつもりです。(昭和25年10月3日付け封書)

(2) 整理番号6 「三太郎大変面白かつたよ。(昭和25年10月付け葉書)

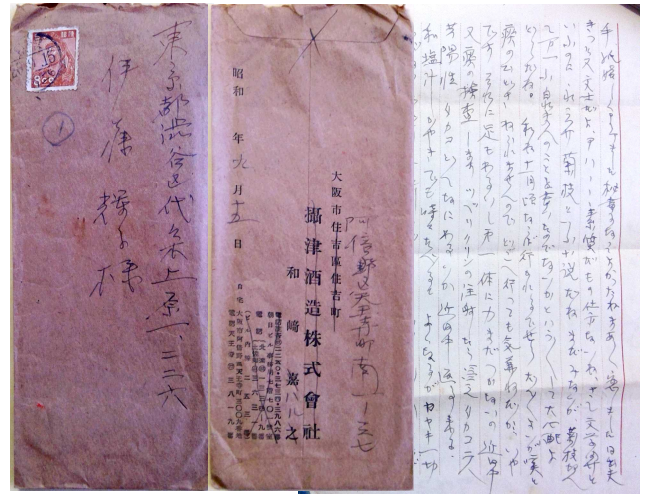




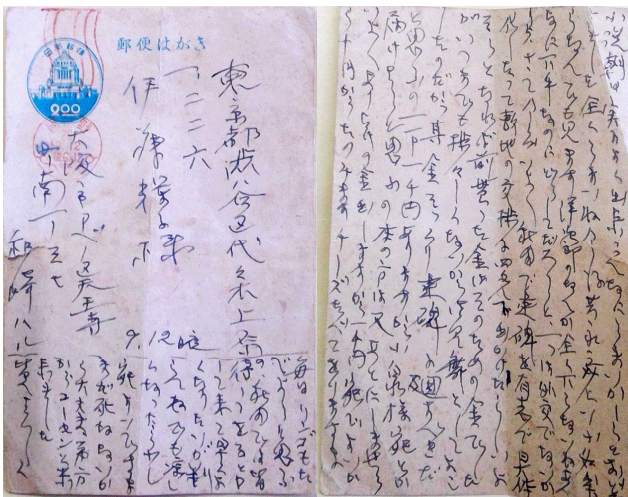
(3) 整理番号 32 「永之介さん書いたの今日よみ明日朝によむつもり」(昭和 26 年 9 月 6 日付け封書)



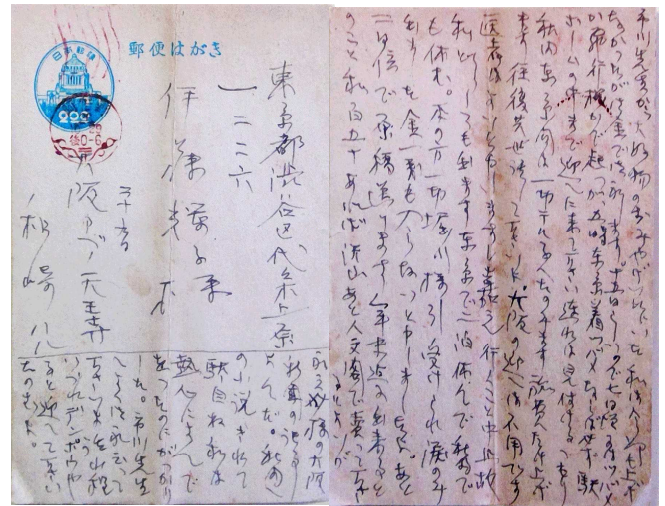
(5) 整理番号 34 「さて文学界といふのに永之介菊枝といふ小説だね」(昭和 26 年 9 月 15 日付け封書)



(4) 整理番号 33 「小説朝日実によく出来、こんなにうまいかしらとおどろきました。全くうまいね今伊藤永之介といふ名出たらなんでも見ます」(昭和 26 年 9 月 12 日付け葉書)



(6) 整理番号 40 「永之介様の大坂新聞の記事よんだ。秋田の小説きれて駄目ね」(昭和 26 年 10 月 29 日付け葉書)



※「ハル書簡」は現在秋田県立図書館分館秋田文学資料館蔵